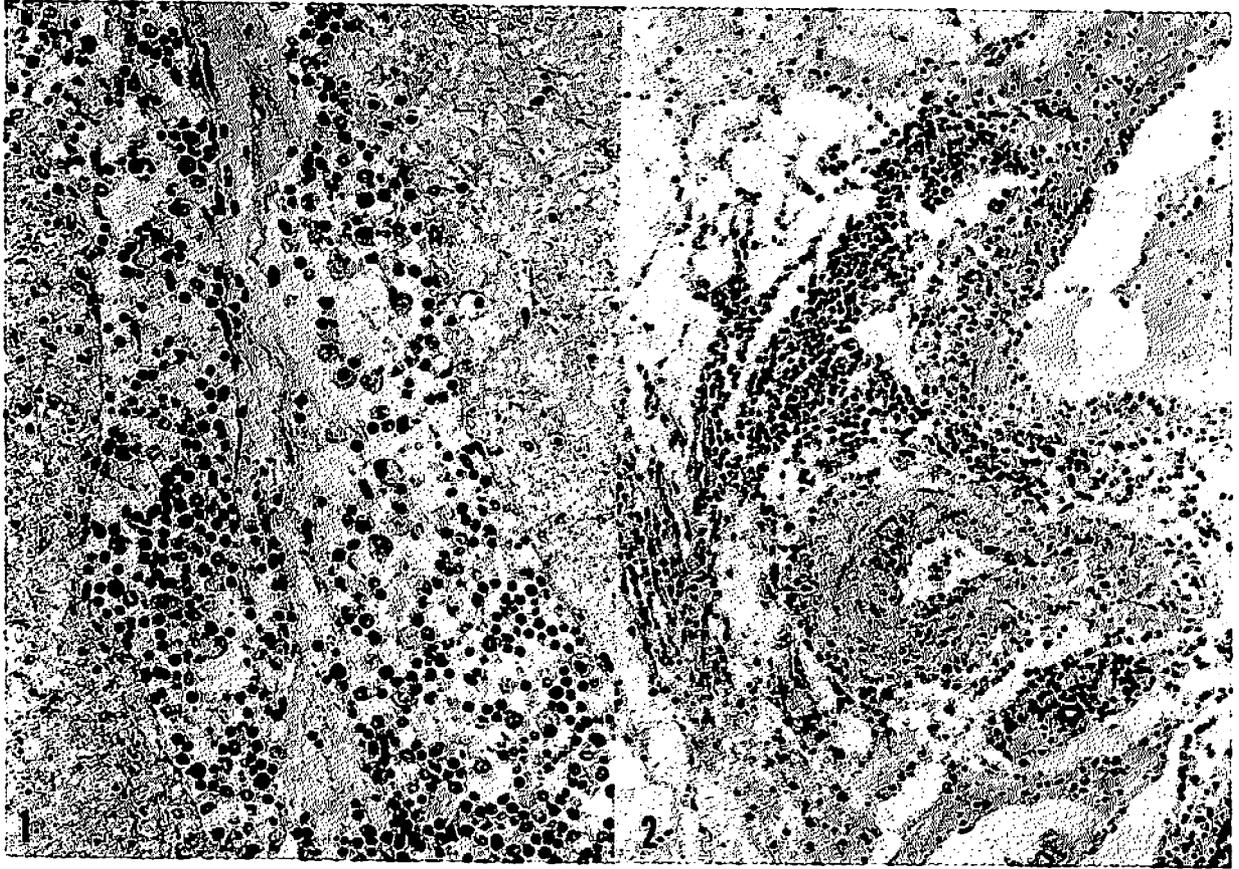


牛の悪性カタル熱例にみられた壊死性リンパ節炎

岩手大学農学部家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.246



ホルスタイン種2才の雌牛で、1975年5月から他の100頭と共に放牧されていた。6月7日元気消失、眼結膜の充血と右角膜の混濁を発見、T. 41.6℃を示した。11日に鑑定殺を行なうまでの間に、左角膜の混濁、流涙、流涎がみられ、次第に膿性となり口粘膜は充血し、壊死性びらんが著明となった。鼻鏡は乾燥し、ひびわれがみられ、粘稠膿性鼻汁をみとめた。食慾は廃絶し、神経過敏となり、赤血球数は669万、白血球数は4,400を数えた。膣生殖器などには異常を認めなかった。

剖検時、1. 両側性角膜炎 2. 口腔および鼻腔粘膜のびらん潰瘍 3. カタル性気管枝肺炎がみられ、全身の組織学的検索の結果、1. 実質性び慢性角膜炎 2. 壊死性潰瘍性口内炎 3. 壊死性鼻気管炎 4. カタル性気管枝肺炎 5. 非化膿性脳炎 6. 肝、腎、心、唾液腺などの実質臓器間質における円形細胞浸潤 7. 全身にみられる脈管炎および脈管周囲炎 8. 壊死性リンパ節炎などが認められた。これらのうちとくに、1, 2, 5-7などから悪性カタル熱(MCF)と診断されたものである。

提出標本は胸腔内リンパ節であり、リンパ濾胞はむしろ縮小し、皮質領域では一部に巨核細胞が散在し、細網

細胞、形質細胞などの増加がみられた。一方、中間洞に接して漿液性線維素性壊死巣が点在し、洞内にはリンパ球のほか、形質細胞や大食細胞が目立った(図1, ×270)。また、被膜領域における高度の水腫と出血がみられ、小動脈中膜の核崩壊を伴う変性、静脈内膜の肥厚と核崩壊細胞浸潤を伴う脈管炎および外膜位における円形単核細胞の浸潤が目立った(図2, ×135)。一部の血管壁は硝子様ないし線維素様変性を示すものもあった。これらの血管変化は全身系統的な所見でMCFの特徴像の一つと解された。

以上の説明に対し、牛の鼻気管炎(IBR)の全身感染を示すものとの鑑別は困難であろうとの附議がなされたが、提出標本はMCFリンパ節病変を代表するものではなく、むしろ性急な組織学的診断の困難さを示すものであり、MCFの診断には全身系統的検索の必要性が強調された。ちなみに、IBRの全身感染例はおおむね8ヵ月以内、とくに生後間もない幼獣にみられることが知られている。また、100頭に達する放牧集団の中で、他に異常牛が全くみられなかったことから、この1頭のみがIBRウイルスに感染発病したと考えることもむしろ困難であった。